



2007年(平成19年)
4月号(No. 743)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

平成18年度第2回通常総会開催	1
平成19年度事業計画	2
平成19年度収支予算書	3
日本山岳会への提言	
「海外の山」と「日本の山」の明日	4
土曜懇話会が開催	7
高尾の森づくり 日本森林技術 協会理事長賞受賞	8
活動報告	9
図書委員会/101の会 /新土曜会	
東西南北	12
黒田長敬の会員章	
地球温暖化と映画「不都合な真実」	
支部だより	14
北海道/東海	
図書紹介	16
図書受入報告	16
会務報告	17
ルーム日誌	18
会員異動	18
新入会員	18
INFORMATION	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

平成18年度第2回通常総会開催

吉永英明

去る3月10日、平成18年度第2回通常総会が開催され、平成19年度事業計画(案)と収支予算(案)が原案通り承認され、監事欠員に伴う監事(補欠)1名が選任された。

年2回の通常総会の開催は、本会の所轄官庁である文部科学省の指導によるもので、昨年11月17日の文部科学大臣の認可に伴った定款改定により実施されたものだ。社団法人東京都山岳連盟等も年2回の通常総会を行なっている。

平成19年度事業計画は、本会が平成21年より実施される公益法人改革において「公益社団法人」化を目指していることから、平成18年度の事業計画における「公益的事業」を「公益事業」に変えて、より公益性を前面に出した計画になっている。特に公益事業に対する各支部の積極的姿勢が伺える。平成19年6月ごろの公益法人改革関連法の施行令等の施行に伴って「公益社団法人」化に向けた本格的準備に着手する予定である。

本会はあくまで「山登り」を中心とする団体であるが、「公益社団法人」に対する社会的評価の優位性、寄付金控除団体となることを中心とした税制面での有利性、現有財産の安定確保の観点から、「公益社団法人」化が欠かせないものと判断して「公益性」をより強調することにした。

平成19年度収支予算等は、会員減少傾向がみられる昨今の状況を考慮し、より安定した財務運営を目指すため一層の経費節減に留意した編成となっている。

しかし、現在、策定中の長期登山計画の実現に向けた動きを支援するための経費等、昨年度に比較し増額したものもある。また、平成19年4月からの「新公益法人会計基準」の施行に対応して、本会

も徐々にこれに移行すべく検討中である。

以上が平成18年度第2回通常総会で審議された平成19年度の事業計画、収支予算等の概要である。会員諸兄のご協力をお願いしたい。



3月10日、通常総会であいさつする平山会長

- * インターネット・ホームページの更新
- * 海外向英文誌「Japanese Alpine News」第8号の発行
- * 青年部会報「きりぎりす」の発行 (年2回)
- * 自然保護委員会会報「木の目の芽」刊行
- * 「山旅徹底ガイド」(改定版)の刊行 (東海支部)
- * 新「山のフィールドマナーノート」の刊行 (自然保護)

(4) その他目的を達成するための事業

- * 第9回秩父宮記念山岳賞の授与
- * 第2回今西錦司賞の授与 (京都支部)
- * 海外登山基金による海外登山の助成
- * 山岳図書の整備・拡充
- * 山岳遭難の予防と対策に関する関係団体との協議
- * 国内関係団体 (日本山岳協会・東京都山岳連盟・日本ネパール協会・日本ヒマラヤ協会・H A T - J ・その他) との連携
- * 海外登山団体との情報交換及び機関誌の交換等
- * 国内博物館・美術館との提携
- * 「上高地山岳研究所」の運用
- * ミニ水力発電の運用
- * 登山記録等の保存・整備

2. 一般事業及び会員のための事業

(1) 登山、集会、施設の運用等

- 4月28日 上高地山研開所 (山研)
- 5月15日 第15回山を語る (水越 武) (図書)
- 5月25~27日 若葉山行 (佐渡 事業)
- 5月 学生部所属大学山岳部新入部員歓迎会 (学生)
- 6月2~3日 新入会員のための徳本峠越えとウエスタン祭 (山研)
- 7月 探索山行「ハッ岳 南北の山谷の差異」(科学)
- 7月 クライミング集会 (三ッ峠 学生)
- 8月4~9日 北信の山を歩く (事業)
- 9月22~23日 オータムコンサート (山研)
- 9月 第12回古道を歩く (図書)
- 10月12~14日 紅葉山行 (未定 事業)
- 10月6~7日 第23回全国支部懇談会 (八幡平 岩手支部)
- 10月 新入会員オリエンテーション (全国9ブロック開催)
- 11月3日 上高地山研開所 (山研)
- 11月3~5日 秋の熊野古道 (事業)
- 11月 第36回山岳史懇談会 (図書)
- 11月 学生部所属大学山岳部マラソン大会 (学生)
- 12月1日 平成19年度年次晩餐会 (於:高輪プリンスホテル 総務)
- 12月2日 晩餐会記念山行 (丹沢 事業)
- 12月30~1月3日 冬季開所 (山研)
- 1月10~16日 オーストラリア・コジオスコ山登山 (事業)
- 1月12~14日 スキー懇親会 (事業)
- 2月 第38回山岳図書を語る夕べ (図書)
- 3月 第25回図書交換会 (図書)

(2) 海外登山等

- 7月~8月 インド・ヒマラヤ マリ峰登山隊 (石川支部)
- 7月~9月 クビツァンボ源流学術調査隊 (関西支部共催)
- 10月 インド・ヒマラヤ シャルミリ峰登山隊 (東海支部)
- 11月 東チベット ゲム・ソソク峰登山隊 (福岡支部)

* 長期登山計画の策定

(3) 会議等

- * 通常総会の開催 (5月19日・平成20年3月)
- * 理事会の開催 (11回)
- * 常務理事会の開催 (11回)
- * 支部長会議 (5月・7月・12月)
- * 支部長・支部事務局担当者会議の開催 (2月)
- * 評議員会の開催 (随時)

(社)日本山岳会 平成19年度事業計画

平成19年4月1日~平成20年3月31日

1. 公益事業

(1) 登山、講演会、シンポジウムの開催等

- 4月 講演会「インド・ヒマラヤ」カバディヤ氏(東京・名古屋・関西 海外)
- 4月 宮崎家裁少年補導受託登山 (年2~4回、宮崎支部)
- 4月28~29日 第10回子ども登山教室 (宮崎支部)
- 6月2~3日 第27回日本登山医学会シンポジウム (宮城蔵王 医療)
- 6月3~4日 第61回上高地ウエスタン祭 (信濃支部)
- 6月 実技講習会「山での救急蘇生法AEDの使い方」(医療)
- 7月7日 第3回山の博覧会「山を知ろう 山へ行こう」(山梨支部)
- 7月5~6日 全国山岳遭難対策協議会 (富山市 指導)
- 7月22日 第6回青少年体験登山 (東九州支部)
- 7月26~29日 第8回自然児学校 (北海道支部)
- 7月 集団登山引率者講演会 (富山支部)
- 7月 第50回高頭祭 (弥彦山 越後支部)
- 7月 山岳映画会「アーカイブ作品上映」(資料映像)
- 7月~8月 上高地インタープリタ活動 (自然保護共催)
- 8月4~5日 白山親子登山 (福井支部)
- 9月 救急蘇生法講演会 (医療)
- 9月 危急時対策講習会 (指導)
- 10月 親と子のふれあい登山教室 (東海支部)
- 10月 スペシャルオリンピック(知的障害者との登山) (東海支部)
- 10月 全国山岳博物館等連絡会議 (資料映像)
- 11月3日 宮崎ウエスタン祭 (高千穂町 宮崎支部共催)
- 11月 雪崩講習会 (指導)
- 11月 シンポジウム (科学)
- 11月 山岳映画会「アーカイブ作品上映」(資料映像)
- 11月 レスキュー講習会 (青年)
- 11月16日 山岳講演会 (岐阜支部)
- 1月 雪崩・雪上技術講習会 (指導)
- 1月 講演会「登山と慢疾患について」(医療)
- 2月 県警察山岳救助指導 (宮崎支部)
- 2月 講演会 (科学)
- 2月 雪崩・雪上技術講習会 (指導)
- 3月 大学山岳部アイスクライミング講習会 (学生)
- 通年 登山教室の開催 (東海支部)

(2) 自然保護・山岳環境保全

- 4月~11月 四国中央分水嶺踏査 (最終年・関西支部)
- 5月20日 「よみがえれ支笏湖の森」植樹に参加 (北海道支部)
- 6月~9月 高山植物盗掘防止パトロール受託事業 (北海道支部)
- 6月 自然観察会 (於:木曽 自然保護)
- 7~8月 山岳レインジャー活動 (山梨支部)
- 9月~11月 奥匹見登山道整備 (広島支部)
- 9月~11月 加越国境等登山道整備 (石川支部)
- 11月16~18日 自然保護全国集会 (於:西湖 自然保護・山梨支部)
- 通年 「高尾の森づくり」(自然保護)
- 〃 「白神山地再生育林」(青森支部)
- 〃 「狼投の森づくり」(東海支部)
- 〃 「小津権現山」県民の森づくり受託事業 (岐阜支部)
- 〃 「大山」横手道上ブナ林育成支援 (山陰支部)
- 〃 森林保全巡視受託事業 (北九州支部・熊本支部)
- 〃 「水源の森づくり」(宮崎支部)
- 〃 環境省「吉野熊野国立公園西大台地区利用適正化計画検討協議会」への参加 (関西支部・自然保護)
- 〃 鈴鹿山系全山環境調査登山 (東海支部)
- 〃 「夜叉が池」環境パトロール (岐阜支部・福井支部)

(3) 出版等

- * 山岳第102年 (2007年) の発行
- * 会報743号~754号の発行

平成19年度収支予算書

平成19年4月1日から平成20年3月31日まで

科 目	平成19年度予算	平成18年度予算	増 減	備考
Ⅱ 支出の部				
1. 事業費				
出版費	11,000,000	10,800,000	200,000	
図書管理費	200,000	170,000	30,000	
調査研究費	2,020,000	1,790,000	230,000	
指導費	750,000	700,000	50,000	
支部関係費	10,000,000	10,500,000	-500,000	
海外諸関係費	170,000	200,000	-30,000	
海外登山補助費	2,000,000	1,000,000	1,000,000	
山岳研究所事業費	1,580,000	1,360,000	220,000	
山岳研究所運営費	2,560,000	2,560,000	0	
ミニ水力発電	200,000	200,000	0	
その他事業費	9,900,000	9,600,000	300,000	
印刷・製本費	0	400,000	-400,000	
刊行物発送費	4,200,000	4,500,000	-300,000	
事業費計	44,580,000	43,780,000	800,000	
2. 管理費				
給料手当	13,000,000	13,000,000	0	
文具消耗品費	100,000	200,000	-100,000	
印刷製本費	1,250,000	1,250,000	0	
旅費交通費	800,000	750,000	50,000	
通信運搬費	800,000	800,000	0	
火災保険料	180,000	200,000	-20,000	
修繕費	100,000	100,000	0	
租税公課	650,000	650,000	0	
光熱水道料	650,000	650,000	0	
電話料	320,000	320,000	0	
会議費	50,000	50,000	0	
什器備品費	100,000	100,000	0	
振替手数料	750,000	700,000	50,000	
銀行振込手数料				
福利厚生費	1,850,000	1,640,000	210,000	
事務所管理費	1,240,000	1,100,000	140,000	
その他管理費	2,500,000	2,700,000	-200,000	
負担金	60,000	60,000	0	
退職金	0	0	0	
賃借料	3,240,000	3,240,000	0	
雑費	600,000	900,000	-300,000	
管理費計	28,240,000	28,410,000	-170,000	
3. 固定資産取得支出				
土地購入支出	0	0	0	
建物建設購入支出	0	0	0	
什器備品購入支出	0	0	0	
固定資産取得支出計	0	0	0	
4. 特定預金支出				
長期計画積立金支出	0	0	0	
秩父宮記念賞基金支出	1,000,000	1,000,000	0	
海外登山基金支出	0	0	0	
終身会費積立金支出	800,000	0	800,000	
退職給与引当預金支出	0	0	0	
特定預金支出計	1,800,000	1,000,000	800,000	
5. 予備費				
予備費	2,000,000	1,000,000	1,000,000	
当期支出合計(C)	76,620,000	74,190,000	2,430,000	
当期収支差額(A)-(C)	-2,188,000	-875,000	-1,313,000	
次期繰越収支差額(B)-(C)	7,694,357	7,606,357	88,000	

科 目	平成19年度予算	平成18年度予算	増 減	備考
I 収入の部				
1. 基本財産運用収入				
基本財産利息収入	2,000	5,000	-3,000	
2. 会費・入会金収入				
入会金収入	3,000,000	3,000,000	0	
復活入会金収入	0	0	0	
通常会費収入	60,000,000	62,000,000	-2,000,000	
終身会費収入	800,000	700,000	100,000	
会費・入会金収入計	63,800,000	65,700,000	-1,900,000	
3. 事業収入				
広告料収入	1,600,000	1,600,000	0	
印税収入	0	0	0	
刊行物売上収入	300,000	200,000	100,000	
山研使用料収入	2,500,000	2,500,000	0	
その他事業収入	2,500,000	2,700,000	-200,000	
事業収入計	6,900,000	7,000,000	-100,000	
4. 補助金等収入				
補助金収入	3,000,000	0	3,000,000	
5. 寄付金収入				
寄付金収入	0	0	0	
募金収入	0	0	0	
寄付金収入計	0	0	0	
6. 雑収入				
受取利息	30,000	10,000	20,000	
雑収入	700,000	600,000	100,000	
雑収入計	730,000	610,000	120,000	
7. 特定預金取崩収入	0	0	0	
8. 敷金等戻り収入	0	0	0	
9. 繰入金収入				
百周年会計繰入金収入	0	0	0	
当期収入合計(A)	74,432,000	73,315,000	1,117,000	
前期繰越収支差額	9,882,357	8,481,357	1,401,000	
収入合計(B)	84,314,357	81,796,357	2,518,000	

日本山岳会への提言

「海外の山」と「日本の山」の明日

江本嘉伸

山岳会創立の精神でもあったパイオニアワークの視点から日本山岳会が海外登山のなかで果たしてきた役割は大きい。しかし、100年を経て時代は大きく変化しつつある。海外登山を中心に日本山岳会の「明日」をレポートしてもらった。

はじめてのアルプス

日本人が海外の山へ出かけた歴史は、ここ140年ほどである。当初は「登山」とは言えず、山への小旅行といった趣きだった。ただ、さまざまな専門を持つ知識人が多かった。たとえばしばしば海外登山史の最初の1ページに登場する江戸幕府の外国奉行、栗本鋤雲(1822-1897)である。

神田猿樂町に生まれ成人して幕府奥詰医師、栗本家の養子となり、医学と本草学を学んだ。幼少の頃は病弱で、それを克服しようとしたためか登山を愛し、25歳で富士山、金峰山に登っている。1858(安政5)年、箱館(函館)へ配属された際、奉行の命によりフラ

ンス人宣教師に日本語を教え、同時にフランス語の伝授を受ける。

1867(慶応3)年、国交交渉のために渡仏した際、スイス・アルプスで植物採集を行ない、日本人で最初にヨーロッパのアルプスに足を踏み入れた人となった(栗本が帰国する前に幕府は瓦解し、維新後は報知新聞の記者となり、新聞界を代表するジャーナリストとして活躍した)。

1884(明治17)年には地質学者でもある画家、高島北海が農務省事務官として渡欧し、モン・ブランやチロル、ピレネーなどの山々をスケッチしている。日本山岳会誕生の頃のメンバーにも共通することだが、当時は植物学者が

山にふれることが多かった。1900年にはドイツ留学中の植物学者、白井光太郎がドイツの植物学者たちとドイツ・オーストリア国境のリーゼンゲビルゲに登った。頂上付近で風雨に見舞われ、凍死寸前の登山だったという。

写真家、長谷川伝次郎がチベットの聖山、カイラスを一周したのは、1925(大正14)年のことだ。長

谷川の写真集『ヒマラヤの旅』は、日本人の探検心を大いに刺激したが、帰国した長谷川の講演を聞いて大いに感動したひとりに立教大学

山岳部OBの堀田弥一がいた。ガルワール・ヒマラヤのナンダ・コート(6861メートル)に目標を定め、1936(昭和11)年、4名の隊員と出発する。日本のヒマラヤ登山隊第1号である。1905年にロングスタッフが試登した北東稜から5人全員が登頂した。

イギリスに育ったアルピニズムがインドなど植民地開拓と連動して探検登山を展開したのに比べ、日本人はヒマラヤの登山について



1936年10月5日、日本人で初めてヒマラヤ登頂に成功した立大隊隊員

はむしろ純粋に欧米流のパイオニアワークをなぞってきた、と言えるだろう。ただしナンダ・コート以後、日本も植民地としていた朝鮮、台湾、満州(中国東北部)などの山、白頭山や大興安嶺などに京大隊が極地法で挑んでいる。

太平洋戦争が始まり、都市も地方も町も農村も軍国主義一色になってゆく。その中で登山界もその空気に完全にはからめとられていったことは刊行されたばかりの『日本山岳会百年史』で指摘されてい

る通りである。戦争はエリートたちの「挑戦心」を一蹴する、そういう側面も持っていた。戦時中、日本山岳会がどのような位置にあったか、は登山史の中で大事な要素である。

幸運、そして困難な時代に

1945(昭和20)年、敗戦。焼け野原ではどうやって食うか、が第一だった。登山家たちの本来の「高みへの欲求」「未知への好奇心」が登山家、冒険家たちの心によみがえってきたのはまず欧州からだった。すでに南北両極点到達は果たされている。ヒマラヤという、市民にはまだほとんど知られていない存在に光が当てられた。

1950年代は、アンナプルナ登頂(1950年、フランス隊)に始まるヒマラヤ8000メートル峰の初登頂の時代だ。53年には最高峰がイギリス隊によって登られ、日本山岳会隊も3次にわたる挑戦の末、1956年にマナスルを登り、アジアで唯一かつ8000メートル峰初登頂の栄誉を許された。マナスルはじめ一連の経緯は「山岳会百年」を記念してこの会報上で何度も取り上げられているので先を急ぐ。

ただその過程で大学山岳部系が圧倒的に多かった山の世界に社会人山岳会が台頭し、やがてリードするようになっていったことは書き留めておきたい。困難な壁やルートを次々に開拓するその行動力は、エリート集団の大学山岳部出身者を寄せつけない迫力があつた。1958年に発足したクライマー集団、「第2次RCC」はそのシンボリックな存在だった。個性溢れる果敢なクライマーたちは谷川岳や穂高の壁に新ルートを開拓し、ヨーロッパ・アルプス三大北壁に転戦した。社会人山岳会の多くは大学山岳部出の「極地法」を嫌い、少数での登攀をあちこちで実践した。

1960年代以降、日本経済の躍進の時代がやってきた。14座ある8000メートル峰のうち最後に残ったシシヤパンマが登頂されたのは1964年だが、この同じ年、日本人は初めて「自由な海外渡航」を手に入れる。この決定は日本人の「地球体験」の裾野を拡大した。日本山岳会は、「新しいルート」を求めて海外登山を次々に考え出し、実践した。資金を得るためにも時代にあつたパイオニアワークが求められ、1970年のエヴェ

レスト、1976年のナンダ・デヴィ、1980年のチョモランマ、1984年のカンチェンジュンガ縦走、と大規模な登山隊の快挙が続いた。

そして1985年9月のプラザ合意。円高ドル安政策を推進し日本がアメリカの赤字解消に一役買ったとされるこの合意は円高不況を呼ぶ反面、海外旅行を拡大し、日本の登山隊は活躍の舞台を広げた。JACでいえば1988年のチョモランマ・エヴェレスト三国交差縦走、92年のナムチャバルワ、95年のマカルー東稜などなどである。中には少々大掛かり過ぎた登山もあったが重慶恒夫が指摘しているように、それらの登山の都度、社会人クライマーが参入し、若い登り手が育っていった。

しかし、この頃から日本人の海外登山は変質し始める。山野井泰史ら海外のビッグウォールに挑戦し続けるクライマーも少数だがいる。平山ユージのように世界のフリークライミングの一線で長く気を吐いている存在も貴重だ。しかし、豊かさの中で山登りの大事な要素である「先鋭の心」はゆっくりに大勢から後退していった。

折から日本の人口は徐々に高齢化し、海外登山を担う人的資源も変化した。登山ブームに沸いた50・70年代に青年期を過ごした人々が時間と経済力を手に入れ、懐旧と憧れの思いで日本百名山に挑戦し、ヒマラヤを目指す。インターネットの普及が登山に必要な情報を瞬時にもたらし、望む者には90年代に広まった商業公募登山がプログラムを用意してくれる。海外登山はその方向性を探りつつ混沌の時代に入り、そんな時に日本山岳会は創立百年を迎えたのである。

温暖化報告と二十一世紀のバイオニアワーク

2007年4月7日のAP電は、4月2日までアメリカ・オレゴン州中央部のリゾート地、ベンド(Bend)で開かれたアメリカ山岳会(AAC)年次総会で深刻な温暖化の影響が登山家たちから報告されたことを伝えた。「氷河が消え、氷のルートが溶け、岩がぼろぼろに砕ける状態」をアルプスやヒマラヤの各地で目撃されているというのだ。二十一世紀の登山家にとって「環境」は大きなテーマとなっている。

大自然の最先端にいる登山家たちの現場報告に注目したAP電は、チベット、ブータンなど最も手つかずの地域である東ヒマラヤの状況について「JAN (Japanese Alpine News)」の編集長でもある日本の登山家・探検家、中村保の報告についても伝えている。「気象変化と氷河」をテーマにした総会シンポジウムに特別ゲストとして招かれた中村は「ヒマラヤの東の氷河」と題してスライド、地図を駆使してここ30～50年の氷河の変動を報告し、高い評価を受けた。なお、この総会で中村保は、日本人では横有恒以来2人目というAACの「名誉会員」に選ばれたことが発表された。東チベットの未踏域踏査のバイオニアワークが評価の対象で日本人の海外登山史の中でこのように位置づけられる人物が出たことは注目に値する。

ヒマラヤの大衆化は、ヒマラヤの汚染を引き起こし、登山者やトレッカーが集中するエリアでは登山者自身によるクリーン・アップ作戦が展開されてきた。ゴミの回収、登攀の痕跡を残さないアルパイン・スタイルの奨励などは一定の成果を上げたが、最近では「二

酸化炭素による温暖化」がそれらの「局地戦」を呑み込みつつある。地球温暖化の深刻な現状は、山のクリーン作戦を地道に実践してきた人々に徒労感を与え始めている。

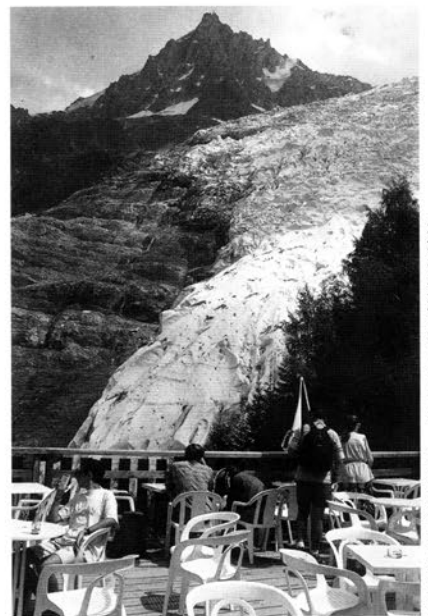
日本人の山登りに関して見逃せないのは、長く登山の最前線を支えてきた大学山岳部の衰退、多くの中・高校での山岳部の廃止だ。IT時代となつてバーチャルな世界で満足してしまう子どもたち、山に連れて行きたくても少しの危険も冒せなくなっている教育の現場、自身も実は自然を知らないままおとなになつてしまった親たち。未来を担う子どもたちのことを考えたら自然の真ん中で過ごす時間の大切さをいかに伝えるか、緊急なテーマだ。

その一方で前述したように定年を間近にした中高年層の登山志向の高まりがある。これは原則的に個人個人のテーマであり、山岳会として何かをするという必要はないであろう。通常の8000メートル峰登山は、自己完結的に個人がやるもの、となつてゆくだろう。百名山もそうだが、ヒマラヤの峰々に関しても「かつて青年期に見果てぬ夢」を見た中高年が時間と経済力

を得て初めてその夢を実現しているのだ、と私は思う。

山岳会が組織としてヒマラヤ登山を実行する、というのもムリしてやる必要はないのではないのか。そういう時代は過ぎた。すぐれた登山というものは、これまで同様個人に属するであろう。

登山活動も含め人が動けばそれだけ二酸化炭素が増えるというパラドックスの中に私たちはいる。その中でこれから日本山岳会はどのような哲学をもって明日への方向性を打ち出せるのか。次の世代を引きつけることができるのか。哲学が日本山岳会の会長に問われた事例はあまり聞かないが、日本山岳会の再生、体質改善を考える必要があるので堂々とした議論をする必要があるのでないか。修験道など日本人古来の山との関わり方が、環境問題と関連して注目されていることもひとつのヒントだろう。



氷河の後退が著しいモン・ブランのボソン氷河

先ごろ、国立社会保障人口問題研究所は「2055年に日本の人口の41%が65歳以上の高齢者で占められる」との、衝撃的な予測を発表した。公募登山をはじめとする近年のヒマラヤ登山を見ていて「ノーブレス・オブリージ」という言葉をしばしば想起する。「高い身分の者が負う道徳的義務」との意味らしいが、思えば高い場所に攀じる力を持つ登山家は、それだけで「強き恵まれた者」である。

海外登山をどうするか、の前に日本山岳会を名乗る以上、自分を含めてひとりひとりの生き方が問われている、と思えてならない。

土曜懇話会が開催

■第1回、平山善吉会長「南極」を語る

1月20日14時より、第1回土曜懇話会が104号室で開催、参加者は約40名であった。

懇話会は、平山会長の強い要望によるもので、開催にあたり「日本山岳会は今、入会者の減少と退会者の増加により会員数の減少という節目の時代にある。懇話会は、それを打破する一つとして開くものである。幸い、本会には長い歴史と豊富な人材がある。歴史は山岳文化を育み、優れた人材は、長老から若手まで多士済々である。このような人たちに講師をお願いし、それぞれの立場から山を語っていただき、さらに講演後には講師を囲み、会員同士の懇親を図る楽しい会にしたい」と語った。

講演のテーマは、昨年の「南極観測50周年」にちなみ、「我が国南極観測の50年」である。会長は、昭和31年から36年(第1次〜3次)の南極観測隊に参加、第3次では越冬している。講演を要約すると、

I「前史・探検の時代」、II「南極」とは、III「昭和基地の建設」、IV「昭和基地の生活」、V「観測と成果」の5項目からなり、それぞれの場面に映像で解説。実体験による具体的な説明から、わが国南極観測隊の経緯と研究の成果について語られた。

最後に、「登山に限らず広く話題を提供するという意味で、初めに南極を選んだ。今後、登山の報告や登山文化など、さまざまな分野で活躍している会員の皆さんにお願いし、この土曜懇話会が継続さ



スライドをまじえ「南極」を語る平山会長

れることを願う」と述べた。

(羽田栄治、平井喜久枝)

■第2回、中村保さん「東チベット探査」を語る

2月3日14時より、山岳会集會室で第2回土曜懇話会が開催され、中村保会員による昨年の「東チベット探査」が報告された。約40人の聴衆が会場を埋め盛会であった。昨年で28回目となる東チベットの探査、今回のテーマはキングド

ン・ウオードが1935年に通過して以来誰も通行していない易貢蔵布(イゴンツアンポー)下流域の完全通行であった。しかし、このプランは、ラサのホテルに残されていた中村さんの友人による手紙で無残にも打ち砕かれてしまった。

中村さんから長年にわたりこの地域の情報を得ていた、アメリカ人ジョン・マイスラーがひと足先にこの谷に入るといふのだ。急遽、探査地域の変更をし、2006年10月25日、ラサを4台のランドクルーザーで出発した。

探査地域は、易貢の谷には入るものの易貢湖北方の未踏峰ハユン

ガルボ峰(6388^{メートル})を回る谷(ニウ曲易貢蔵布)の調査。カンリガルボ山群のゴンヤダ(6423^{メートル})、ルオニ(6882^{メートル})の調査(ミック・ファウラーが興味を示しているそうである)。然鳥(ラウー)の西にある米推(ミドイ)氷河、さらにこの谷の西にある米麦(ミメイ)谷の調査。少し戻って波密(ボミ)の町西にある波推蔵布(ボトインツアンポー)の調査と、多彩な地域が探査の対象となった。

この地域はモンスーンの影響を受け、チベットでは珍しい森林が広がっていて、大きな氷河も発達している。林業が盛んであり、大型トラックに満載された巨木が製材所に運びこまれている。探査は鉋で密林を切り開きながら進み、夜には熊の咆哮も聞こえるというチベットとは思えない情景だった。そしていずれの探査地域も未踏峰ばかりであり、史上初めてカメラに収まった山々が中村さんの素晴らしい写真で紹介されて、出席した会員からは賞賛の声が上がった。今回の講演の悼尾を飾ったのは、新たに開通した青藏鉄道車窓からの大パノラマ写真だった。

(河西瑛一郎)

高尾の森づくり 日本森林技術協会理事長賞 受賞

高尾の森づくりの会 白井聰一

日本山岳会自然保護委員会が森林再生のテーマで高尾の森づくりの会を立ち上げてから6年、植樹祭も今年で7回目を迎える。森づくり50年のスパンで考えると、これまでの数年はほんの手始め、まだまだこれからの感はぬぐえないが、植栽地では森林形成が始まり、森づくりの成果を実感できるようになってきた。

経済林から環境林への移行、二酸化炭素吸収源としての森林の活性化、種や生態系多様化の復元などの課題を背負って、全国でも事例の少ない針広混交林づくりの取り組みを開始した。そして、スギ、ヒノキ人工林の中のギャップ箇所

に落葉広葉樹林をつくり、モザイク状の針広混交林づくりを目指して活動し、ここまでは順調に推移してきているといえる。

成長の過程を定量的にフォローし、これらの取り組み課題が達成されているかどうかを検証するため、高尾の森づくりの会 白井聰一に調査を開始したのは、森づくりの2年目からである。とくに高尾では群状集団植樹方式を採用している。混植方式では成長の早いものが有利で、多様な樹種の森づくりが難しい。そこで100平方メートルの中に20〜25本の同一樹種の苗木を植え、究極的にどの樹種においても1〜数本の形質優良木の育成を目指している。この方式はまだ取り組み事例もデータも少ない。そのため、毎年苗木の展葉期に調査を行ない活着・成長を調査しているが、蓄積されたデータを眺めていると、樹種による違いや日照、土壌などの違いにより成長の差が見えてきて面白い。

将来どこかで発表の機会が得られればと思っていたが、このたび、関東森林管理局主催の「平成18年度関東森林管理局業務・林業技術発表会」で発表させていただくことになった。高尾小下沢国有林の森林管理を通じて日頃われわれの活動に対し貴重なアドバイスや情報提供をいただいている東京神奈川森林管理署高尾森林事務所の中島森林官と共同発表を行なった。

発表会は2月6、7日に開催され、局内の5森林管理署から15編のテーマが発表されたが、治山、植生回復、森林教室の取り組みなどテーマは多彩で興味深いものであった。われわれは「高尾小下沢国有林での落葉広葉樹の森づくり6年間の活動でわかったこと」という課題で発表した。

本来、林業やその普及に携わる林野庁の職員の発表の場であるが、部外者の私としては日本山岳会自然保護委員会や高尾の森づくりの会の理解、支援をいただくまたとないチャンスと思い、会の紹介にも時間を割いた。

調査結果としてまとめ、発表した要旨は、①苗木の活着・生存率は日照条件のよい南斜面のほうが劣るが、一旦活着してしまうと南斜面のほうが成長が早い。②害獣虫やその他の成長阻害要因により、群状集団の消滅がもたらされることは少ない。③ガレ場での植樹にはポット苗、ジフィーポット苗を

用いることによりハンデキャップを克服できる。④樹種別に見ると、高尾山に固有の樹種の生存率が高い。⑤群状集団別に見ると、群が消滅してしまったものの3・2割、第2段階（群状集団植樹方式の保育管理手法として独自に定めたもの）へ移行したものの5・0割で全体としては順調に成長している、という内容のものであった。

以上の発表に対し高い評価をいただいたき、日本森林技術協会理事長賞をいただくことになった。また5月に行なわれる全国の森林管理局レベルでの森林技術コンテストにも推薦していただいた。

今回の発表は植生に関するものであるが、その成長が消費者としての生物種や生態系にどういう影響を及ぼしていくのかについても知りたい。そのため、植生の変化に伴って、それに依存して生きていく生物の変化をもフォローする必要があると思っている。自然保護活動の一環として森づくりに取り組んでいるのだが、その結果としての自然の移り変わりについても目が離せない。

活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です

図書委員会

図書交換会

「会員の持っている山岳図書の交換、販売会をやるのではないかと、というのはいかねてからの念願であったが、二月の図書委員会で、ひとつ会報に予告を書いてどの程度反響があるか、アドバランをあげて見たら、ということになった。」「予期に対して会員からの反響はさっぱりで、ただ一通細井氏から端書が寄せられただけであった。委員会一同は大いに落胆し、それでは中止しようということに一時はなったのだが、やはり乗りかかった舟なので思いなおしてやってみようということになって準備に取りかかった。」「目星しい会員に当りをつけ、趣旨を説明し、出品の依頼状を出し」「ルームに入りに入られる会員諸氏のあいだにも話題となり」「小林義正さんを初め、

図書委員の面々は古本屋のオヤジよろしく一冊一冊値段をつけた。」「当日にも持ち込まれる本などあり、係りは大汗をかいたが、とにかく開催まで漕ぎつけた。」「何しろ珍しい本で、非常に安いものがあるの」「多数注文のある場合は抽せん。」「初めての試みで、どういうことになるのかフタを開けてみるまでなかなか心配だったが、好評のうちに終えることの出来たのはまことに幸いだった。」

引用が長くなったが、会報「山」273 (1968年3月) 号と282 (同12月) 号にそれぞれ掲載された「第1回山岳図書交換・即売会」の記事である。273号には署名はないが、この時の図書委員長は深田久弥氏。その深田氏は4月から図書委員長兼務のまま副会長を務めることになる。282号の記事を書くのは山崎安治氏である。

そう、「図書交換会」はこんな様子で、40年近くも前にそうそうたるメンバーの元で始まったのだった。そして15年前に第23回を最後に休会となっていた。



15年ぶりに開催された図書交換会

昨年8月の会報で、再開する図書交換会の出品図書を募ったところ、20名の会員から和書403点、洋書18点、あわせて421点の出品があった。14年の空白期間をおいたことで、かえってタイミングがよかったのかもしれない。また今回、初めての試みとして郵便やメールでの購入申込みを受付けた。会報やホームページに目録を公開すると、北は北海道から南は九州

まで幅広く、71名もの会員から申込みがあった。インターネットなどの通信手段や宅配便の普及、口座振込の利便性など、環境が整った今日だからこそ可能になったといえる。

さて3月3日。本の内覧開始は11時30分だが、11時から「本好き」が集まった。集会所の机の上には所狭しと本が並ぶ。みな熱心に1冊ずつ確かめ、欲しい本の購入を申込み。この申込みリストに地方からの申込み分を加えて抽選が始まったが、ほとんどの本が4〜5倍の倍率となった。抽選は塗り箸のクジ引きで、不参加の申込み分は図書委員が代理で引いた。

1番の人気本は「山を想へば―百瀬慎太郎遺稿集」で、なんと倍率は28倍。参加者がクジを引き当てるると大きな拍手が起きた。

またもう一つの目玉、入札本の『山のぬくもり―畦地梅太郎手摺版画集』は4名から入札があり、最高額26万6000円に落ち着いた。その金額には全員から歓声が上がった。畦地梅太郎の版画はファンが多いので、全国の会員に広く公開したことが良い結果を招いたようだ。

当日の参加者はその場で会計を済ませたが、不参加の地方の会員への本の発送と代金の回収は、後日に回すことになった。なお、回収した代金の8割は出品者に返金することになっており、この会報が届く頃にはすべての処理が終わる予定である。

「会員相互の図書の交換会」という初期の趣旨にそった、JACならではの催しになったのではないかと自負しているが、価格を安価に設定しすぎて、本をないがしろにしているのではないかとの指摘を受けたことも、今後の反省材料としたい。

(三好まき子)

第15回山岳史懇談会 「日高山脈の登山史」開催

3月3日、図書交換会終了後に104号室で開催、46名の参加者があった。全国の各支部の登山史シリーズの第1弾として、北海道支部の高澤光雄さんをお招きして語っていただくとの、平井吉夫委員長との挨拶で開会した。

高澤会員は30年余にわたって北海道の登山史の発掘と記録に打ち込んでおられるが、昭和47年に発表した『北海道登山史年表』が、



講演する高澤光雄会員

郷土史研究家に「登山家はエリート意識を持っていて、大衆登山は記録に値しないのか? 北大の戦時下での登山活動は検討を要するものがある」と酷評されて、ショックを受けたとのこと。これをパネに、各市町村史、地質調査や測量登山、各山岳団体の部会報を徹底的に収集し、20年後に増補改訂版、2年前にその後の記録を増補して発表された。

昭和57年5月、ルームで催された三水会で「慶応と北大のカムイエクウチカウシ山の初登争い」の話がされたこともある。

日高山脈は季節によつては、難しい山ではないので、ぜひ、皆さんも登りに来てほしいとPRされる。

高澤さん自身も、登山史を調べているうちに未踏のルートを見つけて、昭和52年暮れから神威岳南西

尾根を登った。当時、林道が奥まで延びたばかりで、途中の険悪な沢は遡行せずに登ったので、記録に入るようなものではない、と謙遜される。

坂本直行さんが昨年生誕100年を迎えて、記念的な作品展も開かれた。同氏は、札幌二中在学中に「山岳旅行部」を設立した。北大に入学した頃は、英国がエヴェレストに登山隊を送り込み、マロリーとアービンが遭難するなど、ヒマラヤブームが巻き起こっていた。当時の日高山脈は、まだ未踏峰が多く、直行さんは日高山脈をヒマラヤに見立ててのめり込み、遂に原野に開拓農民として移り住み、絵を描きながら登山に没頭した。昭和6年刊行の『北海道の山岳 登山と案内』(横有恒序文)に日高山脈を執筆した。また、昭和10年2月に北海タイムスの取材を受けて「冬山の魅力、永遠の神秘境」として、未踏峰が26座あることを述べている。

北大山岳部員が、昭和15年1月にペテガリを目指して、雪崩に遭い、8人が埋没死亡した。その年の暮れに早稲田がペテガリ岳遠征を予定して、北大に打診したが

断られた。戦後になって、早大は昭和22年暮れから長大な東尾根から挑み、厳冬期第2登を果たした。北大隊がペテガリで遭難した時、留学中だった、フォスコ・マライー二さんは、生まれたばかりの娘さんが発熱したため、2日遅れて入山、現地へ搜索に向かう坂本直行さんと現場まで同行し、遭難現場の模様をいち早く伝えた。マライー二さんは、ヨーロッパアルプスの体験と文献から、雪山登山にイグルーの有効性を新聞等で訴え、北海道でイグルーを普及させた人でもある。

歴史的なエピソードを散りばめながらの高澤さんの話は1時間あまり続き、日高の登山コースやペテガリの冬期ルート等の質疑応答で締めくくった。(松澤節夫)

101の会

初山行「鎌倉アルプス」

2006年度の新入会員オリエンテーション後、有志33名で12月に101の会を結成した。そのメンバーによる初山行を、3月18日、鎌倉アルプスで行なった。

3月にしては寒い朝、会員18名



青空の下、初山行での記念撮影

とゲスト12名は、鎌倉在住会員のリーダーのもと、建長寺へむけて北鎌倉駅を出発した。

建長寺境内のオカメ桜は散りかけていた。半増坊への急な石段、入会年度は若い、平均年齢の高い一団が登る。登りついた富士見台には、青空を背景にしたすばらしい雪の富士山が用意されていた。小休止後、鎌倉の街並みや海を眼下にチラチラと眺めながら、天園峠の茶店へ。この「おでん」を食べ、昼食をとることが目玉の一つでもあった。

昼食後、沢を下り、鶴岡八幡へ。雅楽の奏される神道での結婚式が挙行中であつた。その厳かな式に、

メンバーは遠い昔の自分の姿を思い出したようで、参拝よりもその式に関心を寄せていた。

散会後、市内で初山行反省会を行ない大いに盛り上がり、4月11日岩殿山、5月11日景信山、6月11日鍋割山と、向こう3カ月の計画をたてた。

(小林建夫)

新土曜会

講演会「アンデスの黄金」

2月14日、山岳会104号室において、昨年に続き2回目となる講演会を開催した。演題は「アンデスの黄金」として、古代アンデス文明形成期の研究の権威である大貫良夫東京大学名誉教授に講演をお願いした。新土曜会会員以外の方々も含めて悪天候にもかかわらず18名の方にご参加いただいた。

大貫氏はもともと泉靖一先生の弟子として、東大の大学院生ときからペルーにおける先史時代の遺跡の発掘に携わってきた。当日は数多くの発掘の経験の中から、黄金製品を見出したクントウル・ワシ遺跡の発掘についてお話を頂いた。

クントウル・ワシ遺跡はペル

北部アンデス山脈西側の斜面にある。おそらくBC1200年からAD2000年頃の遺跡と思われる。最後は破壊されて放棄されたらしい。この時期は全世界的に人類が己のレーゾン・デートルを求めて、宗教、哲学の形成期となつた。

大貫氏はここで1988年から発掘を始めた。遺跡は重層されていて一つ一つの層の年代の特定が困難であつたが、建築のデータと土器の編年、さらに絶対年代の測定も含めて年代測定を行なった。1989年の発掘時に最下層と思われる床面に塗りこめられた円い穴があることに気づき、ここを発掘したところ、人骨とともに金製の耳飾り、5面ジャガー金冠、14人面金冠など多数の純度の高い金製品が発掘された。ペルーの発掘史上初のことである。

大貫氏は無論トレジャーハンターではないので、金製品発掘はいわばおまけであり、クントウル・ワシ遺跡の文化の特徴、編年、周囲の遺跡との関係を考察し、どうやらクントウル・ワシ遺跡は、より古い海岸の文化と似ており、先行する文化と思われていたチャ

ビン・デ・ワンタルとは兄弟の関係にあることなど、学問的な講演が続いた。

その後、大貫氏は日本で寄付金を募り、クントウル・ワシの村に発掘品を保存、展示する博物館を建設した。またユネスコの基金によって壮大な神殿の外溝の復元を行なった。そして、ついには大貫氏はこの村に別宅を作つて年に数カ月を過ごしているという。ほとんど地球の裏側といつてもよいクントウル・ワシ村に住むという大貫氏の執念を見せられたような気がした。

(箕岡三穂)

ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここが得意です。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック

(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422



東 西 南 北

黒田長敬の会員章

長田義則

会報『山』1月(740)号に手塚宗求氏が投稿された「パッチを巡る話」に興味をひかれ、調べてみた。

天下人秀吉の軍師・黒田如水(官兵衛孝高)の子・長政は、筑前福岡藩主黒田家の初代であり、関ヶ原の戦い(1600年)で活躍した。長政の死後、3男の長興(1610-1665)は、福岡藩から5万石を分与されて、秋月藩主黒田家の初代となった。長興は島原の乱に出陣して戦功をあげ、道路整備や開墾をすすめ、藩体制の確立に力を尽くした。

手塚氏の持つ会員章の持ち主、黒田長敬(1885-1963年)は、秋月藩主黒田家の13代目にあ

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

たる。大正元年、米国コーネル大学文科を卒業、大正3年に帰国した。宮内庁に勤務し、大正、昭和天皇の側近として奉仕。

調べを進めるうちに14代目の黒田長榮(1923-)氏を知り、書信でお尋ねをしたところ、次のように丁寧なる返信をいただいた。「拝復、一月三十一日付の書簡確かに拝見しました。父が登山に関心があった様に思われますが、私は父より一度も登山について話を聞いたことはありません。父は学習院高等科では野球部に属し、三塁手として活躍しました。当時は現在の様なグローブが無く、殆ど素手でやっていた様で、父の指先はみな曲がっていました。

大正3年に山岳会の会員になっている様ですが、私の推測では誰かに頼まれて会員になったのではないかと思います。ご希望の様なら登山歴は私の知る限りでは、申し

訳ありませんがありません。私が学校へ入学してからは、よく神宮球場へ六大学の野球を見に連れて行ってくれました。

私は秋月に父の死後、財団法人秋月郷土館を設立し、現在に至っております。機会がありましたらご覧ください。最近発行のカタログ雑誌『通販生活』に私に関する記事がありますのでご覧下さい。(略) 敬具 二月三日 黒田長榮

文中の雑誌『通販生活』春号には「旧華族・黒田長榮さんを訪ねる」の取材記事を7ページにわたる掲載。会員章・337番の持ち主であった長敬の詳しい系譜と、人となりを知ることが出来る。

会員名簿の赤坂区福吉1番地は、現在の赤坂溜池の交差点一角すべて。下ると田町通り、一ツ木通り。長榮氏はそこに生まれ育ち、校友会の副会長や霞会館の常務理事、顧問を歴任した。さらに、84歳を鏢として故郷秋月黒田藩に代々伝えられている「抱大砲」の再現には、自ら陣羽織を着て指揮をとったそう。

長敬の入会紹介者については、ルーム図書室で分かると思う。

地球温暖化と映画『不都合な真実』

山本良三

映画『不都合な真実』は、前アメリカ合衆国副大統領ゴア氏の、1000回に及ぶスライド講演会を映画化したものである。一言でいって、衝撃的といつていいほどの素晴らしい出来栄だ。また、カラー版翻訳本『不都合な真実』(ランダムハウス講談社刊 枝廣淳子/訳)も出版されている。

地球温暖化は、人間活動から発生する二酸化炭素に起因することがはっきりしてきた。これまで、地球温暖化の原因にはいろいろな要因が考えられ、それぞれの国の政治指導者に都合のいい事実だけが取り上げられ、「不都合な真実」は無視されてきた。その結果、いつの間にか地球環境は引き返せないほどに悪化しており、今のままの経済活動を継続すれば、今世紀中に地球の生態系は破壊され、人類は生存の危機に見舞われることが明らかにになった。人類生存の危機である。

不都合な真実

AN INCONVENIENT TRUTH



アル・ゴア

地球の未来

地球のためにあなたが出来る最初の一步は、この事実を知ることだ。



映画「不都合な真実」の書籍版

カラー版翻訳の『不都合な真実』

石油、石炭、天然ガスなどの化石燃料の大量消費により、大気中の二酸化炭素濃度が急激に増大して、その温室効果による地球温暖化が、世界各地で異常気象を引き起こし、人類に壊滅的な打撃を与える可能性が、日一日と強まっている。これは関連する膨大な科学データ等から、もはや疑いの余地はない。しかし、今なら未だ引き返せる。人類の生存環境を死守せねばなるまい。そのために、人間一人ひとりとはどのように暮らせばいいのか。ゴア氏は具体的な提言を示す。

- 1、省エネの電化製品を使いましょう。
- 2、冷暖房の設定温度を下げましょう。
- 3、徒歩もしくは自転車利用を増やしましょう。

- 4、できればハイブリッド車に乗りましょう。
- 5、公共交通機関を利用しましょう。

- 6、できるだけ自然エネルギー(太陽、風力)の利用を考えましょう。
- 7、たくさん木を植えましょう。
- 1本の木は、その生育中に1トン以上の炭酸ガスを吸収することができます。

- 8、家の断熱材を厚くしましょう。
- 9、ゴミを減らしましょう。

- 10、リサイクル品を使いましょう。

- 11、行政へ環境問題について問い合わせをしましょう。

- 12、環境問題を重視する政治家に投票しましょう。

- 13、もしいなければ、自ら立候補しましょう。

など、二酸化炭素発生「零」を目指して誰もが取り組める目標を掲げる。

提言を実行するには、幾らかの出費を強いられるが、これは地球市民に課せられた責務と判断すべきであろうと思われる。行政、研究機関、大学、民間企業などでは、化石燃料を使わない新技術の開発に取り組むのは勿論のこと、既に悪化している地球環境を改善する

研究開発調査も実施しなければならぬ。これは、人類に課せられた難問中の難問であるが、人類の叡智が問われている。

世界最大の二酸化炭素排出国であるアメリカは、京都議定書に批准していない先進国2カ国の一つである。他はオーストラリアである。なぜ批准しないのか。共和党のブッシュ大統領はこのように述べた。「批准するとアメリカ経済の成長が阻害される」と。何という身勝手な言葉だろう。地球環境問題よりも自国の経済成長を優先させる姿勢は地球市民としては許せ

ない。これがアメリカ共和党の政治政策態度である。「不都合な真実」とは、地球環境の悪化を示す多くの科学的データを共和党にとっては不都合な真実として無視した内容である。

日本も二酸化炭素排出の大国だが、安倍内閣も環境問題よりも経済成長を優先させる姿勢を言明しており、京都議定書の目標値を達成できるかどうかは微妙である。

一方、最近発表されたIPCC(気象変動に関する政府間パネル)の第四次評価報告内容はゴア氏の講演内容を一段と強化するデータ

山と氷河の図譜

—五百澤智也山岳図集—

五百澤智也 著/B5判/144頁/2,940円

(カラー63点、2色刷33点、モノクロ33点、計129点の作品掲載)

ヒマラヤと日本の山や氷河の細密鳥瞰図・展望図、地形図、そしてアルプスの山と氷河の水彩スケッチ、さらに日本の氷河地形分布図と日本列島地貌図など192点。全作品に解説付。

五百澤智也の山岳鳥瞰図『山の科学画』展

千葉県立中央博物館 2007年3月3日(土)~5月27日(日) 9:00~16:30

日本の登山・スキーの発展を側面で支えた店

好日山荘往来(上)

大賀寿二著/四六判/310頁/2625円

山とスキー用具の変遷と店の戸をたたいた岳人たちの話。

2006年秩父宮記念山岳賞受賞!!

雲の上で暮らす

アンデス・ヒマラヤ
高地民族の世界

山本紀夫著/四六判/400頁/2730円

美しくも厳酷な環境で暮らす人びとに寄りそった40年。

〒606-8161京都市左区
一乗寺本町15

ナカニシヤ出版

TEL.075-723-0111
FAX.075-723-0095

http://www.nakanishiya.co.jp/ [表示価格は税込]

を満載していた。大気中の二酸化炭素濃度の急激な増加はなぜ起っているのか。有史以来、人間活動が発生させる二酸化炭素は、海洋や陸地に吸収されて大気中の二酸化炭素濃度に急激な変化を及ぼしていなかった。しかし、産業革命以来大気中の二酸化炭素濃度は上昇をはじめ、以後右上がりの上昇を続けている。特に最近10年間の上昇率は幾何級数的なカーブを描いている。

すなわち、海洋や陸地の気温上昇が二酸化炭素吸収能力を低下させ、大気中へ移行する二酸化炭素濃度が急激に上昇し始めているのである。この二酸化炭素濃度が温室効果を高め、急速な地球温暖化が進展している。そして最早、地球上に二酸化炭素を吸収する能力がなくなりつつあることを示している。

人間活動が日々地球の生態環境を駄目にし、地球に負の遺産を蓄積している。

そろそろ人類がその気になって、地球に蓄積されつつある負の遺産の増大を防ぎ、改善対策をとられなければ、人類に二十二世紀はやってこない。

支部

北海道支部

イグルー三話

暖冬で積雪が少なく、恒例となつた元旦の三角山の頂上にイグルーを作れなかった。しかし、札幌円山動物園から依頼があり、西門内側のキッズ広場に雪を集めて大きな積層式八段のイグルーを支部だよりを通してサポーターを求め、2月3日に完成した。

円山動物園ボランティアが日本山岳会北海道支部の指導により作成したという立派な掲示板を見て、社団法人としての立場を少し理解してもらえたのではないかと思っている。

2月4日の三角山三の坂広場は強風雪であったが、札幌雪祭りのオーブニングの意味をもった行事であり、例年通りのイグルーが完成。イグルーの中は暖かく、子供たちと楽しい会話がはずんだ。

だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

2月10日は当別町の中小屋中学校グラウンドに、大きなイグルーを4基も作成した。当別は北海道開拓の歴史上、積雪が多く苦勞した地域であるが、児童数の減少により中小屋中学校は一昨年、小学校は昨年3月に閉校している。国道275号線の横にある中小屋中学校は災害防災備蓄センターとして活用され、夜具・食器類をはじめ多くの備品がボランティア活動で集められ、今回は冬の野外活動としてイグルー作成を指導した。

小学生15名は、プラスチックそりに雪のブロックをのせて、3人1組でチームを作り、歌を唄いながら息をはずませてブロックを運搬し、ノコギリでブロックをカットし、夢の世界を実現してくれた。ブロックを切り出したあとに、キャンドルを50本ほど立てて、夜のイグルーを幻想的に浮かび上がらせ、すばらしい演出効果をした。

のは頼もしいPTAのお母さんたちであった。

お父さんグループは、秋に枝を集めて、輪かん作りを子供たちに教え、その手作りの自分の輪かんをはいて、翌日は当別の雪原を歩いた。

ボランティア「シラカンバ」の人たちの自主活動が、年間を通してプログラムになることを期待して帰札したが、夏の恒例の自然学校へつながる人脈となった意義深いイグルー作戦であった。

(新妻 徹)

青藏鉄道チベット走破と

チヨモランマ・ベースキャンプ展望12日間

6/15 発 ¥398,000

～西寧からラサへ1,956km 走破、世界最高峰を望む～
鉄道には航空機のように車内は与圧され、酸素吸入設備もある

Wec

株式会社ウェック・トレック

国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員

〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階

電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

東海支部

冬期ローツエ南壁登山報告会

標高差3300mで世界最大級の壁といわれるローツエ南壁。その南壁を昨年12月27日に登った登山隊の報告会を、2月23日に名古屋の「ウィルあいち」で行なった。当日は支部員のみでなく、一般の方にも無料開放したこともあり、250名収容の会場は満員となり盛況であった。

登山の詳細な内容は会報「山」2月号で田辺治隊長から報告されているので省略し、当日の雰囲気などをお伝えしたい。

冒頭、和田東海支部長から「2



尾上総隊長による軽妙なタッチでの隊員紹介

001年の第1次登山隊は7600mで敗退、03年の第2次は8250mに達したものの天候に恵まれず登頂はならなかった。帰国した田辺隊長の報告により、これ以上の挑戦は困難ではないか、との支部としての雰囲気であった。その後、田辺隊長自身の決意もあり、支部としてやはりやろうとの気運が盛り上がり、日本山岳会の多くの方の支援を得て送り出した。ただ、天候上のリミットである12月20日頃を過ぎても現地との連絡では樂觀を許さず、支部内でもやはりダメかとの雰囲気もあったが、27日に完登。稜線から雪煙たなびくエヴェレストが見えたとの報告で、登山隊よくやったとの感慨に包まれた」との挨拶があった。

次に、平林副会長から「日本の登山界を支える組織である東海支部が送り出した登山隊であり、晩餐会での現地中継のインパクトもあり大きな関心事であった。全会員に感動を与えたことに対して代表してお礼申し上げる。今回の完登に対して日本より海外からさまざまなメッセージが寄せられているのを見ても成果の大きさが評価される。参加した隊員は今後の登山を志す若い人の指導者となって欲しい」との挨拶があった。

続いて山岳誌「岳人」の廣川編集長から「登攀の評価として今回の完登は世界の登山界の歴史に永遠に残る快挙であると考えている。東海支部は登山初心者の集まりである支部友会から最高難度の登山までいくつものレベルの輪で結ばれ、登山文化をよく理解しているので、今後も頑張っていたきたいし、支援していきたい」との評価をいただいた。

尾上総隊長による総括では「南壁完登後C3へ夜9時に戻ったのは神業に近い」との報告と、隊員のそれぞれの個性を軽妙なタッチで紹介した。

田辺隊長の登攀報告では「南壁はこれまで夏冬あわせて25隊挑戦しているが、成功しているのは夏のソ連隊のみで、今回、冬期に完登できたのは自分としては満足している」との報告があった。

報告後の質疑では、「最後の41mを登っていないことに対して4回目の挑戦はありうるか」との質問がでた。これに対し田辺氏は「南壁自体が大きな目標であり、私としては他の山も登りたいので、ロ

ーツエは今回で終わりにします」との明確な意思表示をし、報告会を終えた。

その後、場所を変えて行なわれた懇親会では、各隊員が個別に感想を述べあった。その感想からは、それぞれが固い絆で結ばれているのがひしひしと感じられた。詳細についてはまたの機会に譲りたい。懇親会は23時ごろまで続くほどの盛り上がりであった。

(佐野忠則)

“花”の季節に楽しむ!南米アンデスの山脈

アンデス・ブランカ山群トレッキング 11日間

●旅行代金:¥420,000~¥428,000 ●出発日:5/25・6/6・6/22・7/6発

南太平洋の山旅

タヒチアン・ハイキングと伝説の島・イースター島 8日間

●発着地:東京・大阪 ●旅行代金:¥576,000~¥590,000

●出発日:5/22(火)・6/19(火)・8/28(火)・10/9(火)



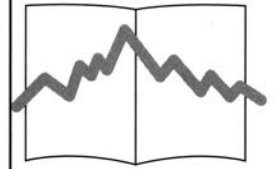
国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 © 本ソフト開発者

アルパインツアーサービス株式会社

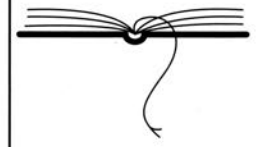
〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海ビル4階 ☎03-3503-1911

大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail:info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

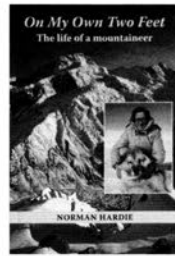


図書紹介



Norman Hardie・著

『On My Own Two Feet』 —The life of a mountaineer—



2006年
Canterbury Univ.
Press刊
150^{ミリ}×227^{ミリ} 323^{ページ}
定価 NZ\$ 38.00

ニュージーランドの登山家ノーマン・ハーディ(1924)の名前を懐かしく思い出す方も多いのではない。1955年、世界第三位の高峰カンチェンジュンガの初登頂を果たしたチャールズ・エヴァンス率いる英国隊に参加して、第2次隊として登頂を果たした彼は、登山活動終了後BCで隊を離れ、単独でシエルパの郷里の村々を訪ね、村人たちと生活をもにした。

その記録が発表され(『In High

est Nepal』1957, London)、邦訳出版された『ネパールの高地にて』(神原達、牧野登訳・朋文堂・昭和35年刊)は、当時ヒマラヤの巨峰の初登頂ばかりが華々しく出回る中で、また、ヒマラヤ山麓のトレッキングということなどとも思い及ばなかった時代に、当時学生だった私たちには新鮮な刺激だったことが思い出される。そのハーディの50年ぶりの執筆となったのが本書である。

当初、1950年代のヒマラヤ遠征にまつわる隠れた登山史を書き残す意図で書き始めたのが、自叙伝へと展開したという。病弱ながらアウトドア志向だった幼少期の山と人との出会い、登山への傾倒、土木技術者としての山岳地帯での生活、職を求めたロンドン生活時代におけるJ・ハントのエヴェレスト遠征隊との関わり、54年のバルン・ヒマラヤ遠征につながるヒラリーとの交遊、前述のカンチェンジュンガ遠征へと話は続く。カンチェンジュンガ以降の山との関わりも尋常ではない。心血を注いだアマ・ダブラム中腹での高所医学実験棟(Silver Hut)の建設、スコット基地のリーダーも務めた南極での活躍、ヒラリーのヒマラヤン・トラストへの長年の献身的協力などなど。ニュージーランドを訪ねた佐藤テルさん率いる日本女子隊との交遊抄もあり、若きテルさんの和服姿の写真があったりする。

ムンバイ、コルカタ、カトマンズ、ロンドンなど世界各地で開かれたカンチェンジュンガ初登頂50周年記念行事参加への旅で波乱に富んだ自叙伝は締めくくられている。

少し気になる記述は、前述の邦訳書『ネパールの高地にて』が1万部は出たとのうわさは聞いたが、ついぞ一銭の印税ももらえなかったという話。朋文堂無きあと、言うて行くところなしということか。当時の関係者はそれなりの礼を尽くされたのだろうか。

(越田和男)

図書受入報告 (2007年3月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
大賀壽二	好日山莊往来(上巻)	307pp/20cm	ナカニシヤ出版	2007	著者寄贈
濱村信	俺山(やま)	252pp/19cm	白山書房	2006	著者寄贈
京大アジア・アフリカ地域研究科・他(編)	国際登山探検文献センター図書目録 2006	251pp/30cm	京都大学学士山岳会	2006	発行者寄贈
金田正樹	感謝されない医者——ある凍傷Dr.のモノローグ	244pp/19cm	山と溪谷社	2007	出版社寄贈
若林隆三	雪崩の掟——Law of Avalanche	175pp/21cm	信濃毎日新聞社	2007	出版社寄贈
山岳写真同好会・山岳会(編)	魚野川事故報告書及び本多由佳子さん追悼集	96pp/30cm	上智大学山岳部・山岳会	2007	発行者寄贈
山岳写真同好会・四季(著)	四季讃歌(写真集)	83pp/25cm	東京新聞出版局	2007	出版社寄贈
日本山岳百年史編集委員会(編)	日本山岳百年史(本編)	382pp/22cm	日本山岳会	2007	当会発行
日本山岳百年史編集委員会(編)	日本山岳百年史(続編・資料編)	432pp/22cm	日本山岳会	2007	当会発行
保川周治(編)	マカルーII峰——第二次ヒマラヤ登頂報告	160pp/26cm	雪標山岳会	1977	購入
ファクス・ヒラリー(共著) 山田晃(訳)	南極横断(上巻)——地球上、最後の冒険	211pp/20cm	光文社	1959	図書交換会購入
ファクス・ヒラリー(共著) 山田晃(訳)	南極横断(下巻)——地球上、最後の冒険	214pp/20cm	光文社	1959	図書交換会購入
日本山岳会(編)	高所登山研究	373pp/22cm	山と溪谷社	2007	図書交換会購入
Lowell Thomas	Lowell Thomas' Book of the High Mountains	512pp/24cm	Julian Messner	1964	鷲晴夫氏寄贈
James Ramsey Ullman	Kingdom of Adventure——Everest	411pp/22cm	William Sloane	1947	鷲晴夫氏寄贈



3月理事会

日時 19年3月14日 18時30分

20時30分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】 平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、吉永・賛田・石田・篠崎・大蔵・野口・斎藤・藤井・石橋・古野各理事、竹中・内田各監事、小倉・重廣・今村各常任評議員

【委任】 渡邊理事

●開会に先立ち平山会長より、今回が平成18年度最終の理事会である。平成19年度は新役員が運営することとなるが、継続すべきものは引継書を作成して新執行部に申し送りたい。

5月の総会まで気を引き締めて対処して欲しい旨発言があった。

【審議事項】

1 首都圏の支部化に伴う支部運営費の助成額について

栃木県・茨城県・群馬県在住会員による支部化に対しては、第10回(2月度)理事会において細則第11条規定の支部運営費を助成することが了承されているが、首都圏1都3県については、本部財務への影響を考慮すると全額の助成が困難なことから、助成の額及び方法等について知恵を出し合い、今後継続して検討することとした。

(継続)

2 本会会員による海外トレーニング等への違法勧誘行為に対する注意喚起について(会報への掲載文)

第10回(2月度)理事会に引き続き検討。会報に掲載する注意文の文言について常務理事会で再検討のうえ、4月号または5月号に掲載することとした。

(承認)

3 「新公益法人会計」への移行について

平成16年10月に「新公益法人会計基準」が施行され、平成18年4月1日以降速やかに新基準に移行することとされているため、平成19年度の早い時期において新基準の適用に移行することとして体制の構築等新執行部に引継ぐこととした。

(継続)

4 「山岳」転載許可願：越後支部「越後山岳」(支部創立60周年記念特集号)への第53号外7号分の関連記事の転載。

(承認)

5 その他

平成18年度最終の理事会のため、今後の理事会のあり方等について次のような意見が出された。

①会長および副会長が担当している各委員会(総務、財務を除く)の担当を会長・副会長以外の理事にした方がよいのではないか。

②会報担当に出席して戴いたうえ、理事会における審議内容を把握してもらい、併せて次号の記事等についての予告をして戴きたい。

③1件10万円を超える各委員会の支出および突発的支出については理事会で検討すべきである。

【報告事項】

1 平成18年度第2回通常総会

(吉永)

去る3月10日、弘済会館において開催。出席者84名、委任3104名。平成19年度事業計画(案)及び収支予算(案)、監事1名の欠員に伴う監事(補欠)の選任が原案どおり承認された。なお、これらについては3月中旬に文部科学大臣宛提出する。

2 平成19・20年度新役員候補の選任状況について(会長)

定款、細則および理事会確認事項に定められている手順に従い、進めている。3月15日に会長経験者および前副会長から意見を戴き、新会長・副会長について3月17日の評議員会に図る予定である。

3 日本アルパインガイド協会における不祥事の解決報告について(吉永)

日本アルパインガイド協会の実技講習の際における講師と受講生間の不祥事については、某団体より本会も友好団体として意見を求められていたが、今般、調査結果等を記した文書が寄せられ、お詫びとともに全面解決した旨の報告があった。

4 ネパール在住・大津明宣会員 よりの報告

① P 29 (7871^ト) が先般事故死されたグルン博士に敬意を表し、「ハルカ・グルン・ピーク」に変更された。

② パルン・リ (7012^ト) がネパール・中国国境画定委員会の決定により中国に属することになり、ネパール側からの登山が出来なくなった。

ルム日誌 3月

- 1日 アルパインスキークラブ
3日 図書委員会
5日 総務委員会
6日 図書委員会 アルパインスキークラブ
7日 常務理事会 事業委員会
フォトビデオクラブ 一
〇一の会
8日 山岳地理クラブ 山の自然
学研究会
12日 自然保護委員会 アルパインスキークラブ
13日 アルパインスキークラブ
ゆきわり会
14日 理事会 指導委員会 山想
倶楽部

- 15日 科学委員会 01会
17日 評議員会
19日 総務委員会 資料映像委員会
20日 山研委員会 インターネット小委員会 三水会
22日 自然保護委員会 指導委員会 アルパインスキークラブ
23日 学生部指導委員会 青年部委員会
27日 プモリ研究会 00会
28日 常務理事会 つくも会 麗山会
29日 総務委員会
3月来室者598名

会員異動 (3月)

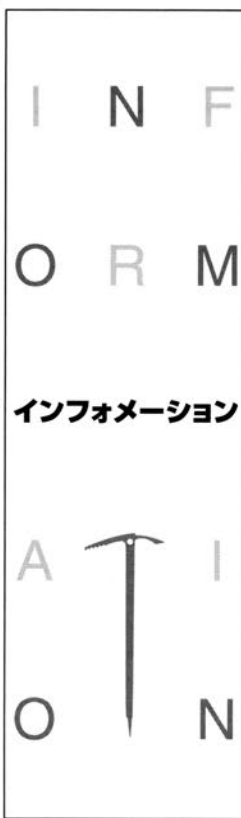
物故

- 高橋桓志 (10399) 07・3・17
谷川菊雄 (4813) 07・3・20
望月 力 (2403) 07・3・29

退会

- 立正大学体育会山岳部 (5342)
中山恵暢 (6818) 信濃
松岡正久 (7070) 信濃
高橋俊紀 (7309) 岩手
井古田忠男 (7748)
吉川利雄 (9159)
石澤六郎 (9201)

- 永目洋子 (9422)
彦坂侃白 (9695) 東海
橋目 茂 (9987) 関西
田中 貢 (10447)
小島清子 (10265) 東海
本田克也 (10873) 石川
西川隆義 (10952)
奥山和夫 (11013) 山形
今井 誠 (11017) 東海
阪本雅人 (11158) 京都
大沼良典 (11193) 山形
磐 広人 (11224)
吉田秀樹 (11284)
渡邊 久 (11507) 福島
松永忠則 (11590) 東海
一谷恭次郎 (11648) 岐阜
高橋妙子 (11678) 岐阜
玉越弘志 (11874) 東海
鈴木 等 (11992) 宮城
植田皓二 (12116) 青森
竹原則嘉 (12718) 広島
長野末光 (12756)
安藤千鶴子 (12785) 東海
星原信之 (13157) 北海道
高桑佳徳 (13224) 東海
井上 佳 (13617) 関西
改名
岡本良子 (9228) 旧姓澤田



インフォメーション



注 意
最近、本会会員であることを標榜してインターネット等を通して海外トレッキング、登山に勧誘し、旅行者的業務を行なっている会員が存在するとの指摘があり、現に本会に対し苦情が寄せられております。本会会員としての矜持をもち、いやすくも関係法令に違反することのないよう十分にご注意下さい。
総務担当理事

◆白神山地ブナ林再生事業

青森支部

世界遺産白神山地のバッファゾーン周辺の成育不良杉林地をブナ林に再生するため、除伐や植樹などを行ないます。

寝袋、食器必携。できればテントも各自で用意。青森空港送迎は要相談。

日程 6月22日(金)～24日(日)
集合 22日8時 JR弘前駅東口、および10時30分 奥赤石

解散 24日15時 奥赤石林道ゲート
費用 食費1食500円(現地で徴収)
定員 50名
申込 6月12日までにハガキカメラで須々田秀美あて
(☎036-0103 平川市本町北柳田96-2)
✉ia03144@yahoo.co.jp

◆新入会員歓迎企画「ウェストン祭参加と焼岳登山」
山研運営委員会
06年、07年度入会の新会員を対象にした仲間作りの企画です。
新緑の焼岳を登り、翌日は上高地で行なわれるウェストン祭と午餐会に参加します。新入会員以外の参加も大歓迎です。
期日 6月2日(土)～3日(日)
費用 1万円(宿泊、午餐会、保険料等)

申込 5月20日までに堀嘉余子あて
(☎&FAX 03-3330316922)

◆探索山行予告 科学委員会
日時 6月23日(土)～24日(日)
場所 戸隠高原
テーマ 山岳信仰
詳細は5月号に掲載します。

◆年間山行計画ができました
山想倶楽部
8月の南アルプス、10月の黒部など季節ごとの登山や春スキーと盛りだくさんです。計画の詳細を、希望の方にお送りします。
電話、FAX、メールで問い合わせください。
中川秀利まで (☎03-3990-3222) FAX 03-3990-3227

✉h.dandy@adagio.con.ne.jp
◆山本紀夫(第8回秩父宮記念山岳賞受賞者)写真展「雲の上で暮らす—アンデス・ヒマラヤ・チベット」
会期 4月21日(土)～5月20日(日)
(10時～18時、月曜日は休館。ただし4月30日は開館、5月1日は休館)
場所 たばこと塩の博物館(渋谷区神南1-16-8) ☎03-3476-2011

入館料 大人100円 小・中・高校生50円

◆編集後記◆

●待望の『日本山岳百年史』が完成し、今から読むのが楽しみです。それにしても編集を担当された方たちは、大変なご苦労があったと思います。次号の5月号で、その模様を綴ってもらってもいいです。

●『JAN』の編集長をされている中村保さんが、アメリカ山岳会の名誉会員に選ばれました。『チベットのアルプス』などの書籍の編集を担当させていただいただけに、とてもうれしいニュースでした。アメリカ山岳会の年次総会での講演も含め、中村さんにも次号で報告してもらおう予定です。
(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 743号

2007年(平成19年)4月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 平山善吉
編集人 神長幹雄
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社